

# 海外の障がいアートに対する認識と現状 リサーチ2025

インド



[The Transformative Power of Art as Care for People with Disabilities](#)

## 目次

1. [サマリー](#)
2. [背景](#)
3. [現状](#)
4. [今後の展望](#)
5. [参照記事一覧](#)
6. [アーティスト紹介](#)

## 1. サマリー



[The Transformative Power of Art as Care for People with Disabilities](#)

## 感じたこと

インドでは、宗教の影響がないとは言えないが、障がいを持つ人への否定的な認識の大きな要因に、彼らが自身・家族の経済的支援ができない/負担になるという認識が挙げられる。また、美術館が健常者にとっても親しみある公共の場ではないため、障がいを持つ人がアートと接点を持つことが難しく、この点は今後の改善点として障がいを持つ人たちが挙げたことは自然だと思われた。そして、単に生計手段としてアート活動を行う人とアーティストとして活動する人が、現状、障がいを持つアーティストという枠組みの中に混在しており、障がいを持つ人の雇用支援の強化とアーティストの作品のアートとしての価値の純粋な評価がなされるべきではないかと感じた。

健常者・障がい者に依らず、アートを享受できる環境の創出が今も課題として存在しており、障がい者の雇用環境改善で、生計手段としてのアーティストという選択肢をなくし、真にアーティストとして評価を得ている人びとの存在感が高められるべきではないだろうか。

## 背景

障がい者に対して否定的な認識を持つ人びとが多いことが判明したが、思想的要因は必ずしも主要因ではなさそうである

自身・家族の経済的支援ができない負担になることが障がいを持つ人への否定的な認識の主な理由のようにみられる

- インドの大多数の人、特に地方部に住む人にとって、障がいと貧困は強い関係性を持ち、障がいが貧困状態を深化させ、障がいを持つ人びとの脆弱性を高め、社会からの疎外を引き起こしている。[...]また、未だ国内に残る社会的スティグマも、障がいを持つ人びとの統合に対する障壁を一段と厚くしている。この「社会的スティグマ」は、2006年までインド政府が支持していた障がいの慈善モデルが関連しているように思われる

インドでは美術館・博物館自体が人びと一般にとって、親しみある存在ではない

- 美術館は公共施設としての価値より、残酷な植民地時代の歴史を忘れさせないようにする存在ということで評価を得ている。また、美術館の利用も美術館ではなく来館者自身の責任とされ、つまり、車いす等で利用ができない場合も、来館者側で対応することが求められ、美術館はそれらに対応する必要がないと考えられていた。

上記の要素が重なった結果、障がいを持つ人のアートへの鑑賞・体験・活動可能性は限定されている

- 障がいを持つ人は芸術の価値を理解できないと健常者からみなされることが多く、彼らの美術館での体験が、美術館の専門家に詳細に決められてしまう恐れがある(つまり、自由に見て回れない)。
- 障がいを持つ人への、教育・栄養・生計・医療等の基本必須要素の提供が、彼らの文化的・歴史的遺産に触れる機会より優先されることが多い。彼らの内の1人は、「障がいを持つ人にとって、‘余暇’は、違う世界の言葉です」、と述べた。

現在インド政府も、自国が国際的に高い評価を得られる国にすべく、障がい者関連の事項に取り組むが、それは障がいを持つ人びとの側の運動に対応する、という受け身の形で、その歩みは遅い

- 2016年に障がい者の権利保護法が制定され、同法は、障がいを持つ人の福祉と力づけを目指し、国連障がい者権利条約の原則に則り、障がいを持つ人の権利の保護・向上を目指すものである。同法は、利用可能性・教育・雇用・社会的保護・法的制度の利用を含む幅広い分野に適用されるものであり、障がいを持つ人の生活の様々な面での包摂と幸福の保証を目的としている。ただし、同法以降に実施された関連する取り組みの大半は障がいを持つ人の生活の基盤レベルへの取り組みである。

## 現状

思想的・政策的に、障がい者へのケアは意識されていたが、障がい者とアートを結びつける発想はみられず、外部(アートセラピーを導入した職員・障がいを持つアーティストの制作過程等)からアート制作を始めた障がいを持つ人びとが多いようにみえる

- ある女性は、は電車の事故で両腕と片足のほとんどを失った後、デリで手を使わずに絵を描くアーティストに出会い、それが彼女を足を使って絵を描くことに挑戦する気持ちにさせた。
- (病院内にある障がいを持つ青年のための施設で)ワイヤーバスケット制作は日課となっていたが、アートセラピーの一つでもあるゼンタングルを導入した結果、それは単なる一つの活動ではなく、セラピー的習慣となり、(活動実施に対する)小さなご褒美は、達成感を育んだ。各青年が自身の作品に対し、自身のものである(そしてそれに対して責任がある)と感じるようになった。彼らは自身のノートで自身を表現し、一つのパターンの動きから何らかの独自のものを創造していった。

ただし、障がいを持つ人のアートに対する評価は、純粋なアートに対する評価ではなく、“(困難を)乗り越えた話”を語るものとしての評価であり、アーティストもそれを期待しているように思われる

- 参照記事の著者は、“NPO法人障がい者の家族による、Arpanaファインアートギャラリーで開かれた独自のアートの展示会”限界を超える2022年”[...]は、障がいを持ちながらも、自身の障がいに活動を制限させておらず、自身の才能には限界がないと確信する、プロのアーティストに機会を与えている”、と表現している。その表現が、著者が障がいがありながらもアートを制作することを評価しているように思われるが、アーティストは明らかにプロ意識を持っていることから、“ずれ”が生じているように思われる。

また、アート作品制作が生計手段になり、喜ぶアーティストもみられることから、障がいを持つアーティストの間でアートの質・意味・熱意等の差があるように思われる

- 2007年にインド首相賞で傑出した障がいを持つ女性として受賞し、ギネス世界記録も受賞したある女性は:「アートの世界が私の自立を可能にし、組織的活動が作品の向上を支えました」。
- ある男性アーティストは、芸術作品制作により、誰にも頼らずに生活できるようになったと語った。
- NGO団体Kai Rassiは、各アーティストが障がいを持ち、それを強みにし、それを作品によって表現したアート展示会を主催した。「他の慈善事業としての展示会とは違います。私たちは、[様々な人]を招待し、彼らの作品を見て・買ってもらう、芸術的に専門的な機会の創出を意図としています」、と同団体所属者の1人は説明した。同団体は、障がいを持つアーティストの雇用機会獲得支援を試みている。「私たちは学業修了の先の、未来の存在への認識を持ってもらいたいのです」、と同団体の共同創始者は、より踏み込んで述べた。

## 今後の展望

上記の現状の打開には、まず、障がいを持つ人のアートへの鑑賞・体験・活動可能性の向上が最優先であるようだ

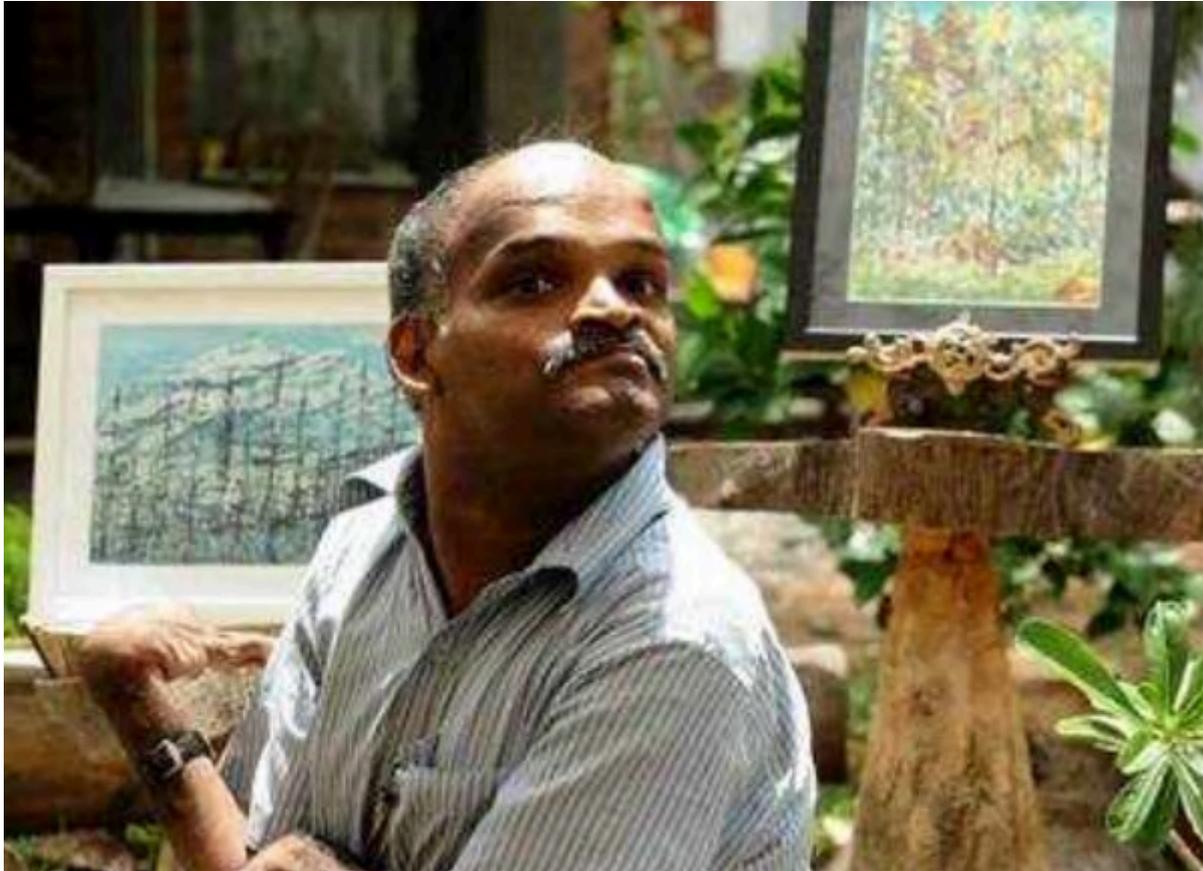
- ある遺産建造物建築家で利用可能性コンサルタントは、障がいを持つ人の包摂に向けて、社会的・法的な水準を大幅に向上させる必要があるインドで、彼らが参加/鑑賞できる文化的施設・イベントの実現の困難さを認識した:「インドでは、障がいを持つ人の利用可能性に関する議論は車いすとトイレに始まり、そこで終わります。ですが、(身体障がいに配慮した)インフラの利用以外に知的障がいやニューロダイバーシティを配慮し、それらを持つ人びとが利用できるようなものを提供する必要があります」。
- インドで最初にあらゆる種類の障がいを持つ人の包摂を設計段階で考慮事項として盛り込んだ美術館の1つ”アート・写真美術館”は、建設時に障がい者の包摂に関与した様々な組織との話し合いが行われ、障がいを持つ人びとを包摂担当マネージャーとして雇用した。MAPiは、インドで最初に美術館側が障がいを持つ来館者の要望を

把握するために、彼らの利用経験を調査したと知られている美術館で[...]彼らの回答に共通してみられた希望事項は、「質の高い」包摂であった。

そして、単なる生計手段としてではなく、アーティストであることを追及している、障がいを持つアーティストへの注目度が上がれば、障がいを持つ人とアートの関係の認識が変わるのではないだろうか

- 聴覚障がいを持つあるアーティストは、[...]コーヒーを彩色に用いており、他の人がアーティストを目指すよう刺激を与えたいと考えている。
- ポリオの後遺症を持つある彫刻家の作品は国内各地の名高いギャラリーに所蔵されており、彼は様々なワークショップを子ども向けに実施している。

## 2. 背景



[Finding strength in disabilities, these artists paint a world of their own](#)

今回のインドに関する調査の参照記事から障がい者に対して否定的な認識を持つ人びとが多いことが判明したが、思想的要因は必ずしも主要因ではなさそうだ。(2011年の統計では、ヒンドゥー教徒が79.8%、イスラム教徒が14.2%、キリスト教徒・仏教徒・ジャイナ教徒が6%)<sup>1</sup>

- ヒンドゥー教では、障がいをカルマと輪廻の視点から捉えることが多く、多くの教徒は、生き物の誕生の巡りは前世での行い次第であり、今(人間として)生きている人は、その誕生の巡りの結果であると考えている。従って、障がいを持つことも、それは前世での個人の罪深い生き方、または、神/女神の怒りをかった前世での強欲な行いの処罰の結果と捉えられている。ヒンドゥーの神話でも、障がいは邪悪または好ましくないものとして描写されている。だが、同時に、ヒンドゥーの様々な聖典は、身体的・精神的状態に依ることのない、万人が生まれつき持つ、森羅万象を動かす力と価値を強調しており、それら聖典の一つバガヴァッド・ギーターは、平等の原則に重点を置

<sup>1</sup> (参照: <https://www.bbc.com/news/world-asia-india-58595040>)

いて[...]個人は身体能力ではなく、実際の行動によって評価されるべきだと示唆している。

- イスラム教では、万人はアッラー(神)の創造物であり、身体的・精神的能力に依らず、生まれ持って大切に、尊敬と尊厳を享受できるべき存在であるとしている。イスラム教徒は、アッラーが見ている義務であり宗教的習慣であるため脆弱な障がいを持つ人に対する配慮を遵守している。障がいを否定的には捉えておらず、(仏教の言葉で言えば)慈悲の心を持って接する対象とされている。
- 旧約聖書<sup>2</sup>で障がいは、神からの罰であるという考えが示されている。だが、新約聖書ではイエスキリストが障がいを持つ人に慈悲心を持ち接する場面がいくつかあり、それを、障がいを持つ人の存在は、他人への慈悲・包摂・奉仕の実践機会を与えてくれるものである、という教えであるとする解釈が浸透したという。旧約・新約聖書共に、全ての人間は神の想像の中で生み出されたものであり、[...]生まれながらに貴重で愛・尊敬・尊厳を享受するに値する存在であるとしている。障がいを持つ人の存在は、他人への慈悲・包摂・奉仕の実践機会を与えてくれる、つまり、それにより”善い”行いができるということだろう。

むしろ、自身・家族の経済的支援ができない負担になることが大きな要因である可能性がある

- インドの大多数の人、特に地方部に住む人にとって、障がいと貧困は切ることができない関係性を持っており、障がいが貧困状態を深化させ、障がいを持つ人びとの脆弱性を高め、社会からの疎外を引き起こしている。[...]また、未だ国内に残る社会的スティグマも、障がいを持つ人びとの統合に対する障壁を一段と厚くしている。この「社会的スティグマ」は、参照記事の公開年から推測すると、2006年までインド政府が慈善モデルという、「障がい者へのケア」(見方を変えると、障がい者はケアが必要、自立ができない)と関連したものではないかと思われる。(明確な言及はなかった)

更に、美術館・博物館自体がインドの人びと一般にとって、親しみある存在ではないことにも留意すべきだろう

- 美術館は公共施設としての存在価値より、文化的人工物を常時所蔵し、残酷な植民地時代の歴史を忘れさせないようにする存在ということで評価を得ている。また、美術館の利用も美術館ではなく来館者自身の責任とされ、つまり、車いす等で利用ができない場合も、来館者側で対応することが求められ、美術館はそれらに対応する必要がないと考えられていた。だが、その意識は変化してきている。

---

<sup>2</sup>旧約聖書はユダヤ教とキリスト教の聖典だが、新約聖書を受け入れ、聖典としたのはキリスト教だけである。  
(参照: <https://gimon-sukkiri.jp/seisyo/>)

その状況下で障がいを持つ人びととアートとのつながりの形成に対する障壁が存在しているようである

- [...]コンテストで選ばれたDevika Sundar、パフォーマンスアーティストでLGBTQIAコミュニティのオンライン・プラットフォームQueerAbadの共同創始者Anahita Sarabhai、クィアと障がいを持つ人のコミュニティRevival Disability Indiaに所属するNuが、芸術界の健常者至上主義について議論し、[...]Siddhant Shahを交えて、認識の変化の重要性について話し合った。
- 障がいを持つ人は芸術の価値を理解できないと健常者からみなされることが多く、彼らの美術館での体験が、美術館の専門家に詳細に決められてしまう恐れがある(つまり、自由に見て回れない)。
- 障がいを持つ人への、教育・栄養・生計・医療等の基本必須要素の提供が、彼らの文化的・歴史的遺産に触れる機会より優先されることが多い。多発性硬化症を患うHeena(仮名)は、「障がいを持つ人にとって、‘余暇’は、違う世界の言葉です」、と述べた。

### 3. 現状



[Disabilities don't matter: Unique exhibition showcases four artists](#)

#### インドにおける障がいに対する全体的な変化

インド政府も台湾政府と似たように、自国が国際的に高い評価を得られる国にすべく、障がい者関連の事項に取り組むが、それは障がいを持つ人びとの側の運動に対応する、という受け身の形で始まり、その歩みは決して速くはないという

- 1960年～1970年代、結束してはいなかったものの、障がいを持つ人びとから包摂と権利擁護を求める強力な声が挙がっていた。それが1980年代には集団化し、1990年代にNGOの関与が始まった。インドの爆発的な経済成長と利用可能な電子的リソースの拡大により、政治上での大きな変化と人びとの障がいに対する関心の高まりが起きた。
- それまでの活動の結果、1995年に障がい者保護法(機会平等・権利擁護・完全な参加権の保証)(PWD)が可決された。これにより、教育機関と行政サービス上での障がい者の存在が可視化され始めたことで、大きな転換点を迎えた。

- 国連で障がい者権利条約が採択された2006年、インド政府は、それまでの慈善モデルから、障がいを持つ人が平等な教育・経済的自立・リハビリテーションの機会を与えられ、インド社会への社会的・環境的障壁の排除による完全参加を実現できるようにすることをに重点を置く‘権利’ベースのモデルを採用した、障がい者に関する国家政策を採決し、PwDは、2016年に、障がい者の権利保護法(RPwD)制定により置き換えられた。RPwDは、障がいを持つ人の福祉と力づけを目指し、国連障がい者権利条約(UNCRPD)の原則に則り、障がいを持つ人の権利の保護・向上を目指すものである。同法は、利用可能性・教育・雇用・社会的保護・法的制度の利用を含む幅広い分野に適用されるものであり、障がいを持つ人の生活の様々な面での包摂と幸福の保証を目的としている。具体的には、教育(入学枠)と雇用(採用枠)、を得ることができるようにすることを義務付けており、高等教育機関に対して、入学者の4%を障がいを持つ人の入学枠とするよう定めている。
- 他にも複数のプログラムや取り組みを導入している: それらには、障がいを持つ子どものための統合教育課程・精神/学習障がいを持つ人の福祉のための国家の法的機関National Trust・経済的援助プログラム・公共交通機関運賃減額・障がい年金導入・所得税控除・障がい者証明書発行が含まれる。

ただし、これらの大半は障がいを持つ人の生活の基盤レベルへの取り組みである。

## 障がいとアートに関する状況

思想的・政策的に、障がい者へのケアは意識されていたが、障がい者とアートを結びつける発想はみられず(そのため、何をケアとして施すべきかわからず)、外部(アートセラピーを導入した職員・障がいを持つアーティストの制作過程等)からアート制作を始めた人びとが多いように思われた

- Sheela Sharmaは電車の事故で両腕と片足のほとんどを失った後、デリで手を使わずに絵を描くアーティストに出会い、それが彼女を足を使って絵を描くことに挑戦する気持ちにさせた。
- (病院内にある障がいを持つ青年のための施設で)ワイヤーバスケット制作は日課となっていた[...]だが、(研修訪問医であった著者)は彼らの熱意を感じていた。彼らはもっと挑戦したいという意欲を示していた。
- そのため、アートセラピーの一つでもあるゼンタングルを導入した結果、それは単なる一つの活動ではなく、セラピー的習慣となり、(活動実施に対する)小さなご褒美は、達成感を育んだ。各青年が自身の作品に対し、自身のものである(そしてそれに対して責任がある)と感じるようになった。彼らは自身のノートで自身を表現し、一つのパターンの動きから何らかの独自のものを創造していった。[...]ゼンタングルの構造化された創造性は穏やかさ・マインドフルネス・集中の感覚を与えてくれる。それらはそれまで享受してこなかったものであった。

この状況は、インドの“障がい者アート”が確立されていることを意味しているのかもしれないが、記事の筆者の書き方や一部のアーティストも、どちらかという、台湾の障がいを持つアーティストの表現を借用すれば、“(困難を)乗り越えた話”に重点を置いているように感じられる

- 参照記事の著者は、“NPO法人障がい者の家族(FOD)による、Arpanaファインアートギャラリーで開かれた独自のアートの展示会”限界を超える2022年”[...]は、障がいを持ちながらも、自身の障がいに活動を制限させておらず、自身の才能には限界がないと確信する、プロのアーティストに機会を与えている”、と表現している。その表現が、著者が、障がいがありながらもアートを制作することを評価しているようだが、アーティストは明らかにプロ意識を持っていることから、“ずれ”が生じているように思われる。
- C.V. Surendranは[...]一つの作品の完成に2-3カ月をかけている。
- Vyshak Ettukudukkaが[...]描いた時、周りで眺めていた人びとから称賛を受けた。大半のアーティストとは異なり、Vyshakは足指で筆を持ち描画したのだ。障がい者であっても、彼は自身の障がいが自身の追求の妨げになることを許してはいない。  
(周囲の人と参照記事の著者の称賛は、アーティストの望む形だったのかは不明である)
- Ma Joieアートギャラリーは、自身をアーティストとして確立させるために大きな困難を克服してきた、数名の世界のアーティストの作品も展示している。

障がいを持つアーティスト自身や彼らを支援する組織も、彼らの経済的自立をアートに関連した活動で達成している場合が多いことが認められており、それは、経済的自立/貧困が彼らの周囲の人びとからの否定的な態度の主要要因であることを示唆しているのかもしれない

- 障がいを持つアーティストの国際的組織、Mouth and Foot Painting Artists Association(MFPA(口と手で描く芸術家協会))が、[障がいを持つアーティストによる]実演イベントを運営し、そこでは異なる身体能力を持つアーティストの信じられない程に素晴らしい、困難からしなやかに回復する力が披露されている。MFPAのウェブサイトでは、同組織の会員であるアーティストの作品を購入できるようになっている。(つまり、収入が得られる可能性がある)  
MFPAは、様々な国の750名超の会員を有し、内36名がインド出身で更に10名はケララ州出身である。
- 2007年にインド首相賞で傑出した障がいを持つ女性として受賞し、ギネス世界記録も受賞したSunithaは、2004年にMFPAに参加したことが彼女の人生を大きく変えたと話した:「アートの世界が私の自立を可能にし、組織的活動が作品の向上を支えました」。
- Pranav Subrahmanyamは、芸術作品制作により、誰にも頼らずに生活できるようになったと語った。
- 「私たちは、人びとに毎年”限界を超える”に訪れてもらい、着想や意欲を作品からもらってほしいので、慈善事業としてアーティストを紹介しているのではありません。この機会を、参加アーティストへの経済的支援提供・認

知度向上・感謝の象徴を意図しています」、とFOD理事長Preeti Rajender Joharは述べた。(NPO法人FODは1992年、Rajinder Joharが四肢麻痺と脊髄の損傷を患った後に設立された。大部分のプログラムは、障がいを持つ人、特に自身で自身への支援に対して支払うことができない人、の経済的自立を目指したものである; 彼らは支援の手を差し伸べ、自営業のための訓練・教育・支援機器を提供している)

- NGO団体Kai Rassilは6名のアーティストが参加したKai Rassiアート展示会を主催した。各アーティストが障がいを持ち、それを強みにし、それを作品によって表現している。「これは、他の慈善事業としての展示会とは違います。私たちは、アートギャラリー関係者・カフェの経営者・インテリアデザイナー・建築家を招待し、彼らの作品を見て・買ってもらう、芸術的に専門的な機会の創出を意図としています」、と同団体i所属の担当者の1人Divya Raoは説明した。同団体は、障がいを持つアーティストの雇用機会獲得支援を試みている。「私たちは学業修了の先の、未来の存在への認識を持ってもらいたいです」、と同団体の共同創始者であるKadambari Nより踏み込んで述べた。

ここでもアーティストに期待している/制作しようとしている作品は、“(困難を)乗り越えた話”であることが読み取れる。

#### 4. 今後の展望



[The Transformative Power of Art as Care for People with Disabilities](#)

上記に記した、障がい者とアートの接点のなさ、更には障がい者への対応が十分に整備されていない状況で、参照記事では、障がいは、宗教の社会的文脈と法の政治的文脈により、様々な形に解釈されているが、現状、障がいは、利用可能性・平等性・包摂性と関連したものとして認識されており、この点に関する言及が多くみられた

- 遺産建造物建築家で利用可能性コンサルタントのSiddhant Shahは、[...]母の視覚が部分的に損なわれていることで、文化的施設・イベントから排除されるのを問題と捉え、解消への取り組みに着手したが、障がいを持つ人の包摂に向けて、社会的・法的な水準を大幅に向上させる必要がある国での実現が困難なものであったことを語った:「インドでは、障がいを持つ人の利用可能性に関する議論は車いすトイレに始まり、そこで終わります[...]ですが、(身体障がいに配慮した)インフラの利用以外に知的障がいやニューロダイバーシティを配慮し、それらを持つ人びとが利用できるようなものを提供する必要があります」。
- 視覚的表現を他の感覚で理解可能にする取り組みの拡大への障壁は、構造的な問題であるように見える; 参照記事の執筆者は、「(適切な調整ならば)インドの社会文化の文脈に合わせた、全国レベルで承認された触覚的デザインの指針となる枠組みの欠如が問題である[...]。政治的・社会的レベルでは、画像情報が主流となっている時代に、視覚的情報と知識の入手可能性は重要である。国立美術館でのアートと科学の合流が証明した通り、全く異なる領域のように思えるアートと科学は、利用可能性の拡大や包摂的な画像領域の創出において、助け合いができるのかもしれない」という見解を示している。Siddhant Shahは、「包摂性は形式的な追加を意味するものであるべきではありません。包摂性はスペースの設計とイベントの運営に際し常に考慮されるべきものです」と明言している。
- 12歳の脳性麻痺を患う男の子Prabhuは、学校に包摂性が欠如していたために、彼は学校に通うことができないでいた。]現在、彼は定期的に(施設に通い)続けており[...] (施設の担当者)も新たな仲間の参加を歓迎しているが、脳性麻痺を患う子どもとの活動は困難を伴うものであるという。これは、地方部の医療・教育における重大な問題を明示している: (同施設の担当者)のように多くの人が、専心と熱意を示しているが、彼らはそれらの障がいを持つ若い人びとを十分に支援するための、正式な訓練とスキルを欠いており、障がいを持つ人びとへの対応に関する訓練を受けた専門人材の不足。(その状況への改善のために執筆者は、)「単純に、コミュニティベースの訓練プログラムの実施でも現状を変えられる可能性はある。疎外されたコミュニティの多くの人が障がいを持つ人びとに対応できるよう、訓練を受け、カづけられた場合の効果を想像してもらいたい」と意見を述べている。また(執筆者は、)「自身の時間・エネルギー・経済的リソースを、障がいを持つ人びと、特に疎外されたコミュニティの人びとに重点を置く、地方部のセンターに投資するよう、求めたい。それは、創造力の育成・自信の構築・動的&認知的能力の向上を実現させる変革的な力になる。アートに基づく取り組みに投資することで、彼らの世界を明るくさせ、彼らが可能性を模索する力を与え、社会で活躍するための平等な機会の付与を達成できる」とも主張している。
- インドで最初にあらゆる種類の障がいを持つ人の包摂を設計段階で考慮事項として盛り込んだ美術館の一つであるアート・写真美術館(MAP)の]建設時には、「障が

い者の包摂に関与した様々な組織との話し合いが行われ[...]、障がいを持つ人びとを包摂担当マネージャーとして雇用した。MAPは、インドで最初に美術館側が障がいを持つ来館者の要望を把握するために、彼らの利用経験を調査したと知られている美術館で[...]彼らの回答に共通してみられた希望事項は、「質の高い」包摂であった」という。

また、障がいを持つアーティストのアーティストとしての意志/姿勢/目的(≒経済的自立の手段以外の活動継続理由)への注目が高まるべきなのかもしれない

- Shreekant Dubeyは[...]14歳の時、[...]彼は右腕を失った。だが、(彼はアートを追求し続け、)[...]ファインアートで博士号を取得し、彼の作品は国内各地での展示会で購入されている。
- 聴覚障がいを持つAmita Duttaは、[...]コーヒーを彩色に用いており、他の人がアーティストを目指すよう刺激を与えたいと考えている。
- ポリオの後遺症を持つShivraj Singhは彫刻家で、彼の作品は国内各地の名高いギャラリーに所蔵されている。彼は様々なワークショップを子ども向けに実施している。

## 5. 参照記事一覧



[The Transformative Power of Art as Care for People with Disabilities](#)

- [India's Got Talent: Meet 7 Differently-Abled Artists Who Are a Class Apart](#)
- [Disability \(With\)In The Arts: Looking Inward](#)
- [Please touch: Indian art is finally growing sensitive to the needs of the visually impaired](#)

- [The Transformative Power of Art as Care for People with Disabilities](#)
- [Disabilities don't matter: Unique exhibition showcases four artists](#)
- [Bangalore's Museum of Art & Photography takes inclusive design to a new level](#)
- [Showcasing over 100 artworks by 56 Artists with Disabilities from across India](#)
- [Finding strength in disabilities. these artists paint a world of their own](#)
- [Disability History in India: Conceptual Formations in Religion and Law](#)
- [Disabilities in India - statistics & facts](#)

## 6. アーティスト紹介

- Shree Kant Dubey



- Amita Dutta



- [Shivraj Singh](#)